



あー暑い！

朝から鼓膜に響いていた蝉までも、鳴くのを止めた。一人のリビングにエアコンはもったいないと、光代は、窓を開け放つ。そよとも吹かない風のかわりに、にぎやかな声が飛び込んでくる。

「キャー、冷たい！ばーばあ、あっくんが水かけたあ」

幼い声に、今年もこの季節になったんだなあと、右隣の西田さんの庭を覗き込む。

「うほーい！かっこいいじゃん、スライダーじゃん」

続いて左隣の東原さんからも、歓声があがった。そちらを背伸びして見ると、庭いっぱいカラフルなプールが広がっている。

光代の暮らす家は築三十年の建売住宅だ。辺りは、同じような家が軒を連ねている。ほぼ同時に越してきた三世帯。西田、中村、東原とマンガのような並びに大笑いして、仲良くなった。年齢も似通っていて、トラブルもまあちょこちょこあったけれど、今となっては笑い話だ。どちらのお宅も、それぞれお孫さんができ、この時期はお里帰りで大賑わいなのだ。

「今年はまだ派手になってるよお」

光代は、昼寝から起きた夫の一夫に声をかけた。

「ふん、ばかばかしい！ばかでかいプール置きゃいいもんでもないだろうが。毎年毎年飽きもせず。うちの庭まで、水浸しじゃないか」

「いいじゃありませんか、かわいいわよ、お孫さんたち。東原さんの上のお子さん、もう六年生ですって」

妻の話など聞こえないふりをして、一夫は、苦虫をかんだ顔でテレビをつけた。高校野球の歓声が、よけい暑くする。光代はため息を一つそっと吐き出すと、台所に麦茶を入れに行く。

西田さんの奥さんのいつもよりトーンの高い声がする。

「こんにちはー！暑いわねえ、お互い大変ねえ、今年は六人なのよ、孫。名前間違っただけでばっかり。すごいわねえ、お宅のプール。二つ連結なのね！大きなスライダーまで！」

東原さんも大声を出す。

「まあ、お宅こそ！ワニの噴水、迫力満点じゃない。屋根があると、ちびちゃんも安心だし。うちもそういうのにすればよかったな。来年はがんばる！息子と嫁は、孫放り込んで、二人で旅行なのよ！信じられる？四人のお守りで、おじいさんともうへとへと」

両隣の奥さんが、低いフェンスに身を乗り出し、光代の庭を挟んで叫んでいる。

応援していた故郷の高校が負けて、夫は、テレビを消した。

「つまらん、いい歳してこのくそ暑い中、あのばあさんたちは、何さわいどるんだ。子供のうるさいのはともかく、ばあさんまではしゃぎおって。ここは遊園地か！この分だと来年は城が建つな」

そう言うと、一夫は、あくびをしながら庭に出た。奥さんたちは、ちょこっとお辞儀をすると、そそくさと孫の相手にもどった。玄関から入ってきた苦り切った顔の一夫の手には、エアメールがあった。

「あらっ、直人ね！今はどこかしら？」

ぱっと顔を輝かせた光代の前のテーブルに、一夫は封筒を投げる。

「全く心配ばかりかけおって、あの放蕩息子が！」

そう言いながら、横目で光代の手元を見ながら、またテレビをつけた。

光代たちの一人息子は、大学を中退して、

「俺写真を極めるために世界を回って来る」

そう言うとおっけにとられる親をしり目に、アメリカに行ってしまった。それから十年、世界中を渡り歩き、ほとんど連絡してこない。

ぎゅっと手紙を胸に押し当てた光代は、ふんふんと息子の匂いを嗅いで、封を切った。

「お元気ですか？ぼくはすこぶる元気です。仕事も順調です。結婚しました。E l i i s aです。そして、年が明ける頃には、多分親父になっています。夏には一度帰ります。直人」

同封された写真に、目が大きくてかわいいそれでいて知的な感じがする女性が写っていた。結婚式だろうか、普通のワンピースにベールだけかぶったその女性と、殴りたくなるような笑顔の直人が、写っていた。

「えっ、この人、お嫁さん！んまあ！きれいな方、お結納も差し上げないで。でも、いったい、なんて読むの？どこの国の人なのよ！」

光代は手紙を夫に押し付けて、リビングをぐるぐる歩きまわった。くすんだフローリングが、まるで最高級のペルシャ絨毯を敷き詰めたようにふわふわしている。

「全く勝手にもほどがある。何が結婚だ。孫だ」

そう言うと、一夫は、ドアをバンッと閉めて出かけてしまった。

日が暮れかけ、ツクツクボウシも鳴きだした。両隣の大騒ぎも一段落したようだ。両家とも、今夜はバーベキューパーティで、またにぎやかなことだろう。

うれしくて胸のドキドキが収まりそうにない光代は

「うちは匂いを頂戴して、素麺で済ませよう。お料理なんてできそうもないもの」

そうつぶやきながら、ただぼうっと、写真をなでていた。

すっかり暗くなって帰ってきた一夫は、大きな包みを抱えていた。驚いた光代が開けてみると、あひるのかたちをしたベビープールだった。